熊本大学教育学部紀要，自然科学
第60号，21－30，2011

「一人家族」世帯の住宅計画

鳥飼　香代子・持田　美沙子*

Housing Design for Financially Independent One-person Households

Kayoko TORIKAI, Misako MOCHIDA

(Received October 3, 2011)

According to the recent housing survey, although Japan is in the population decrease era, the number of households is increasing because of the trend toward the nuclear family or an increase in one-person households. Particularly, one-person households recently account for as much as thirty percent of the total households.

While family sociological researchers reveal such a transformation of households, housing designers point out that the existing housing design does not sufficiently respond to the diversified relations between occupants and houses. It is widely discussed recently how to incorporate individualization into housing design. To respond to the above diversified relations, the authors try to come up with guidelines for housing design intended for one-person households by studying how they use rooms.

Key words : financially independent one-person households, sleeping, eating, relaxing, looking after guests

1.　研究の背景と目的

近年の住宅統計調査では，日本は人口減少の時代に入っているにもかかわらず，核家族化や単身世帯の増加を受け，世帯数は増加している．とりわけ特徴的なのは単身世帯が全体の30%を占めるまでになっている点である．また，平成20年度住宅金融支援機構の「フラット35利用者調査」によると，マンションを中心に単身世帯の利用増が顕著な傾向を示すようになってきている．例えば，マンション市場（新築・中古共に）では，購入世帯の25%が単身世帯という結果が出ている．マンションの面積別の比較では，60 m²以下の面積では70%以上を単身世帯が占めている．単身世帯が経済的にも自立し，住宅市場では世帯の一つの形態として存在をアピールする時代が到来したといえる事態である．

この10年ほど家族社会学等では，あたらしい家族の変化の方向を表す標語として，家族の「個人化」が「多様化」と並び，定着化しつつある．誰もが同じような，サラリーマンの夫と専業主婦の妻，2人から3人の子供たちからなる近代家族，すなわち，「標準家族」に所属しているという前提が崩壊し，「標準を外れた人々」はいまや多数派になりつつある．つまり，全ての人が属する社会的単位はもはやないものだとすると，社会の基礎単位となりうるものは個人以外にはありえない社会の到来を家族の「個人化」という意味で表現している．

家族社会学等の立場からこのような家族の変容が指摘されるのと並行して，住宅計画学の立場からも従来の住宅計画が住まい手と住まいの多様な関係に対応しきれていないことが指摘されてきた．個人化も含んだ住宅計画のあり方に関する議論が，近年特に活発化している．住宅計画を論じる上では，21世紀の単身世帯の住要求を把握する必要があるが，そのためにはこの単身世帯の親も含めた親族世帯との関係性や帰属組織との関係性，或いは友人などのネットワークを把握する必要がある．

筆者らは，住まい手と住まいの多様な関係に対応するには，個人すなわち「一人家族」世帯の空間のあり方を明確化し，「一人家族」世帯の住宅計画指針を導き出すことが重要と考えこれを本研究の目的とする．

なお，ここでの「一人家族」世帯とは，個人が一人で「家族」を形成している状態である．また，「家族」とは，本研究では，経済的に自立した1戸単位をさす．経済的に自立した1戸単位とは，一人の場合，血のつなが

* 熊本大学自然科学研究科　博士後期課程

りのある複数人数の場合，血のつながりのない集団を形成している場合（「一人家族」世帯の集合体）があると考える．

2． 既往研究と本研究の位置づけ

今日の住空間論を代表する研究として，北川らの戦後の住様式の変化をダイニングキッチンに注目して展開したもの[1]，および切原らの座敷への住要求の変化の研究[2]などがある．また単身世帯の住まいについては，谷本らによる学生など20代の若者に注目したもの[3]と，高齢単身世帯のものがあるが，後者については，グループホーム，高齢者施設など多くの研究がなされている．

近代家族の変容については，家族の「個人化」に関連した多くの指摘があることは前述したが，住宅計画学の立場からも，様々な研究・議論がなされており，加茂・高田らにより「個人化」に対応した住戸の空間配列と生活の適合性に関する研究[4]がある．「地域社会圏モデル」[5]で山本らは「一つの住宅に一つの家族が住む」という戦後の理想的なモデルとされた考え方も，「個人化」の中では呪縛にしか過ぎず，今後はもう少し大きな単位（地域社会圏モデル）で住居システムを考える必要があると述べている．これを発展させた研究として宮野らによる親子・配偶者関係を含まない同居の住まい方に注目し，個人の自立に対応しながらも居住者相互の交流を促進する住宅計画論[6]が展開されている．

これらの研究を踏まえ，本研究では，世帯の最小構成人数である「一人家族」世帯の住宅を計画するにあたっての指針を得るために，経済的に自立した単身世帯の住まい方の調査を行う．「経済的な自立」としたのは，前述したように学生のすまいに関する研究は既往の研究があること，今回研究の主旨とは違いがあると思われたことにより条件を設けた．

さて「一人家族」世帯の住要求分析に関して，筆者らは以下の点に注目する必要があると考えている．

第一に，住居の基本的な役割である，就寝，食事，団らん（一人を基本とするためくつろぎと表記）の空間のあり方である．一人暮らしのため，各機能が重複する，あるいは，明確には分離されない可能性が高いと思われる．さらに経済的に自立した「一人家族」世帯の場合は，趣味の時間を確保しやすいと考え，この生活行為にも注目することとする．

第二に接客であるが，親族，友人，近隣住民などの親しい相手の場合と，親しい関係を前提としない場合に分けて検討する．一人住まいのため，前者の客への重点の置き方に個人差が大きく表れると考えている．個人差は親族世帯や帰属組織との関係性，友人などとのネットワークなどを反映し，LDKとの関係や座敷確保要求などの差が出ると思われる．今回の研究では，住宅の公的な部分を，親しくない外部の人間との交流の場を「外公」，親しい友人・知人・家族との交流の場を「内公」とする．

第三に，後者と関連して，安全対策要求やコミュニティの位置づけなどの要望が出ると思われる．

第四に，親族世帯との関係を反映して，収納要求や住み続けるかどうかといった今後の展望が変化すると考えられる．以上の四点を中心に研究を進める．

本稿では，第一と第二に関して検討する．

3． 調査方法

調査方法は，調査対象住宅の間取りを現地にて調査し，調査票に従い対象者にヒアリング調査を行う住まい方調査法により実施．熊本県内居住の20代～70代の単独世帯30世帯を対象に，調査を行った．

調査の性格上量的把握は困難と判断し，統計処理を目的とせず，記述的方法を用いることとした．

4． 統計調査から見た熊本県における「一人家族」世帯の概要

「単独世帯は」平成22年度の国勢調査の段階で，3割を超えたと言われているが，平成22年度の熊本の国勢調査による統計データは，まだ公表されていない．そこで今回は，熊本県のデータとしては最新の平成20年度の住宅・土地統計調査のデータにより確認したところ，熊本県としては26.57%であった．なお「一人家族」世帯の概要を把握するためには，統計上の「単独世帯」がおおむね「一人家族」世帯に近い概念として使われていると考え，統計上の「単独世帯」を替わりに分析することとした．

熊本での単独世帯の年代別の割合は，平成 2 年の国勢調査では図 1 に示すように 30－50 の年代の単独世帯の割合は 8%～16%であった．しかし，平成 20 年度住宅・土地統計調査の図 1 によると 30－50 の年代の単身世帯の割合は 14～28%となっている．また，男女の単独世帯の割合は，平成 2 年度は 50 代以降，平成 20 年度の 60 代以降は女性が男性の単独世帯数を超えている．

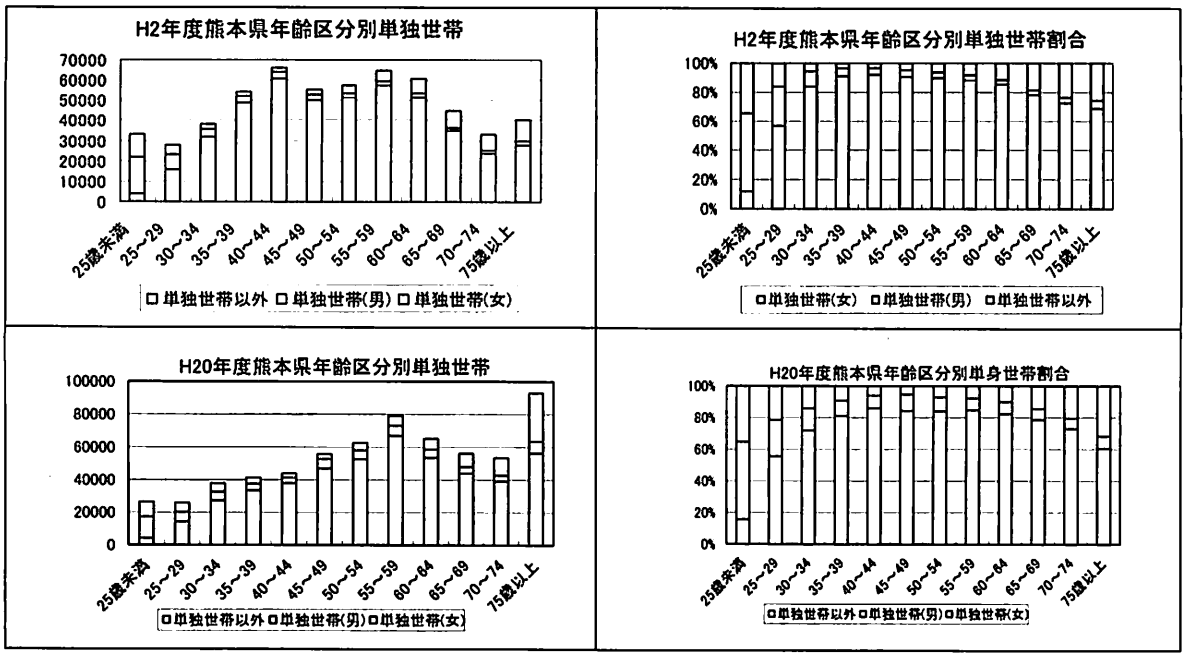


図 1．熊本県年齢区分別単独世帯

また，熊本県における単独世帯の住居の所有関係および建て方は図 2 に示すように，若いときは借家の共同住宅に住まうが，次第に持ち家一戸建てに住むようになる．高齢になるほど女性の持ち家一戸建て住まいが多くなる．

平成 22 年 9 月 10 日発表の，統計トピックス No.47[7]によると，若者の単身世帯では 9 割が借家の共同住宅に居住しているのに対し，高齢者では 5 割強が持ち家の一戸建てに居住しているとあるが，熊本においても図 2 にみるように同様のことが言える．また，男女別に見ると，統計局の全国のデータでは，各年齢層での男女間にあまり違いがなく，持ち家の共同住宅での違いがあると取り上げられていた．熊本県によると，図 3 のようになる．40～60 歳の女性が男性の倍以上の割合で，持ち家共同住宅に住んでいることになる．

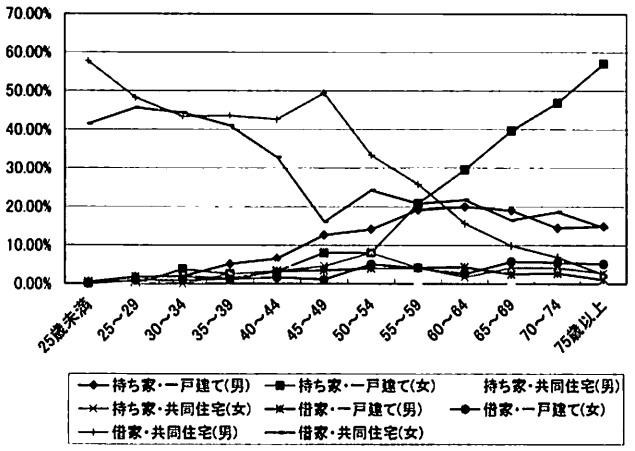


図 2．熊本県の男女別住居の所有関係・建て方

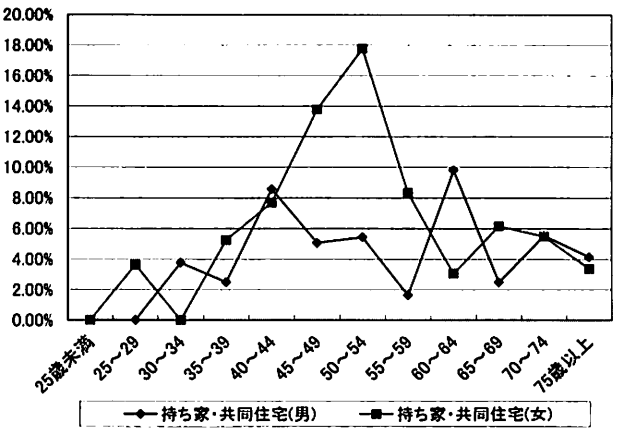


図 3．熊本県の男女別持ち家共同住宅割合

5．「一人家族」世帯の住まい方

調査対象者である「一人家族」世帯の住まい方一覧を表 1 に示す．

表1. 「一人家族」世帯の住まい方一覧

ID	パターン	タイプ	年代	性別	職業	種類	建て方	面積範囲	独居年/総年	食事	食スタイル	就寝	くつろぎ	接客(外)	接客(内)	宿泊場所	仕事	趣味	住まい方の現状と予感
16	ワンルーム	⑥'	30代前半	女	事務職(金)	借家	共同住宅	30㎡～40㎡未満	5/5	LDK	座卓	LDK	LDK	-	LDK	LDK	-	LDK	就寝、食事、くつろぎの空間は、建具・壁により仕切られてはいないが、ベット、キッチンセット＋袖壁により穏やかな分離がなされた状況である。
7	1DK	⑥'	60代前半	男	自営業	借家	共同住宅	30㎡～40㎡未満	2/30	L	座卓	L	L	-	L	-	-	-	DKとして独立しているが、食事はLにて食べている。接客スペースの少なさを外部空間(喫茶店、共用廊下)を利用することでカバーしている。スペースのいる趣味活動も、外部を利用。
21	1DK	⑥'	30代前半	女	技術職(金)	借家	共同住宅	30㎡未満	6/20	L	座卓	L	L	-	L	L	-	L	DKとして独立しているが、食事はLにて食べている。居室空間が1つしかないため、そこで接客、くつろぎ、就寝が行われている
1	1LDK	⑤'	50代後半	女	教員(私)	借家	共同住宅	30㎡～40㎡未満	10/11	LDK	座卓	寝室	LDK	-	LDK	LDK	-	LDK	寝室はLと建具にて分離する間取り。キッチンがカウンターにて分離され椅子に座って食事ができる空間が用意してあるにもかかわらず、TV前の座卓にて食事、くつろぎ、接客。
9	1LDK	⑤'	40代後半	女	技術職(他)	借家	共同住宅	40㎡～50㎡未満	1/1	LDK	座卓	寝室	LDK	-	LDK	LDK	-	LDK	寝室はLと建具にて分離する間取り。キッチンは袖壁で空間を分離。座卓にて床座で食事、くつろぎ、接客。
13	1LDK	⑤'	20代後半	男	技術職(金)	借家	共同住宅	30㎡～40㎡未満	3/1	LDK	座卓	寝室	LDK	-	LDK	LDK	-	LDK	寝室はLと建具にて分離する間取り。パソコンデスクがあるが、ソファテーブルにてパソコンを使っている。食事もソファテーブルを利用。エアコンがLにしかないため、ソファで寝ることあり。
25	1LDK	⑤'	30代前半	女	教員(公)	借家	共同住宅	30㎡～40㎡未満	1/10	LDK	座卓	寝室	LDK	-	LDK	LDK	-	LDK	寝室はLと建具にて分離する間取り。キッチンカウンタがあり、そこでの食事も期待できるが、座卓で食事。
11	2DK	②	50代後半	女	自営業	借家	共同住宅	50㎡～60㎡未満	1/30	DK	テーブル	L	L	接客室	L	-	接客室	L	食事はDK、くつろぎはLとはっきりと分離している。Lはくつろぎ、仕事の事務処理、趣味活動など食事以外のことを何でもする部屋となっている。
15	2DK	⑤'	20代後半	男	技術職(金)	借家	共同住宅	40㎡～50㎡未満	2/4	L	机	L+寝室	L	-	L	L	-	L+寝室	DKとして食事ができるスペースがあるが、Lで食事を取っている。寝室は独立しているが、Lにて作業をしながら寝ることもある。
18	2DK	⑤'	30代前半	男	技術職(他)	借家	共同住宅	40㎡～50㎡未満	1/30	DK	座卓	寝室	DK	DK	DK	-	-	残余室	広めのDKを内公の接客、食事、くつろぎの場としている。事務所ビルの用途変更で住宅としたこともあり、南側の窓に庇が無く、暑い。2つのうちの一つを仕事部屋にしている。
24	2DK	⑩'	20代後半	女	その他	借家	共同住宅	30㎡～40㎡未満	1/20	DK	テーブル	寝室	L	-	L	-	-	L	食事はDKのテーブル、くつろぎはLのソファとはっきりと分離している。身体的障がいがあるため、来客はアポイントのある人のみ。寝室にクーラーがないため、Lのクーラーを建具を全開することにより利用。
26	2DK	⑤'	40代後半	女	公務員	借家	共同住宅	40㎡～50㎡未満	1/5	L	座卓	寝室	L	-	L	L	-	L	DKとして食事ができるスペースが十分あるが、Lで食事を取っている。寝室は独立し、床に布団を直接引いて寝ている。
6	2LDK	⑥	50代後半	女	公務員	持ち家	一戸建て	90㎡～100㎡未満	11/15	LDK	テーブル	LDK	LDK	LDK+残余室	LDK	残余室	-	LDK+残余室	Lと連続している座敷は、客間のイメージがあり、寝室にできないため就寝はLに布団で寝る。外公接客室である座敷はLを通過する必要があり独立していない。残余室は納戸化。
10	2LDK	⑤	50代後半	男	技術職(他)	持ち家	共同住宅	50㎡～60㎡未満	22/30	LDK	テーブル	LDK+寝室	LDK	LDK	LDK	LDK	-	残余室	就寝は、夏場エアコンが効いているLに布団を持ち込んで寝ることもある。一室を趣味の部屋(書斎)としており、くつろぎ空間とはあえて別にしている。
14	2LDK	⑤'	20代後半	男	技術職(金)	借家	共同住宅	40㎡～50㎡未満	3/7	LDK	座卓	寝室	LDK	-	LDK	LDK	-	LDK	食事はテーブルを置くスペースがあるにもかかわらず、座卓にて取る。趣味のパソコンも専用の座卓を使用。キッチン側に空きがあるが座卓近辺に物が集中している。残余室は、納戸化。
17	2LDK	⑤	50代後半	女	自営業	持ち家	共同住宅	70㎡～80㎡未満	7/7	LDK	テーブル	寝室	LDK	LDK	LDK	残余室	LDK	LDK	LDKに大きめのテーブルを置き、食事、仕事、外公・内公の接客、趣味を行っている。畳コーナーを設けくつろぎのスペースとしている。入居前のリフォームにより、3LDKを2LDKに改装。
20	2LDK	⑤'	40代後半	女	技術職(金)	持ち家	共同住宅	60㎡～70㎡未満	6/6	LDK+寝室	座卓	寝室	LDK+寝室	-	LDK+寝室	-	-	LDK+寝室	食事はLもしくは和室(寝室)の座卓。和室とLは建具にて仕切れ全開すると一体的に使用可能。和室、L以外の居室は、納戸化している。
22	2LDK	⑤'	30代前半	男	公務員	借家	共同住宅	40㎡～50㎡未満	1/3	LDK	座卓	寝室	LDK+寝室	-	LDK	LDK	-	LDK	食事、接客(内公)、勉強と、LDKの座卓を使用。建物の構造上音量を抑える必要があり、趣味の音楽、来客には気を使う。収納が全くないため、書斎として単独した一室が納戸化
29	2LDK	④	30代後半	女	公務員	持ち家	共同住宅	70㎡～80㎡未満	3/5	LDK	座卓	寝室	LDK	寝室	LDK	LDK+寝室	-	LDK	食事はダイニングテーブルがあるがLの座卓使用。内公の接客、くつろぎも座卓。和室にお布団で寝ている。外公の来客は玄関から直で出入りができる和室を使用。残余室は納戸化。
8	3DK	⑧	40代後半	男	自営業	借家	一戸建て	50㎡～60㎡未満	2/33	仕事部屋	机	寝室	DK＋仕事部屋	接客室	接客室	-	仕事部屋	DK	就寝は1階の仕事部屋を使っていたが、結露と寒さから2階に移動。英語教室が接客室。趣味活動は仕自転車のトレーニング室としてDKを利用。ガレージも趣味スペース。
19	3DK	⑨	70代以上	女	その他	借家	共同住宅	40㎡～50㎡未満	6/38	寝室	テーブル	寝室	寝室	L	L	L	-	寝室	食事は寝室(和室)のベット用テーブル利用。就寝、くつろぎは寝室(和室)のベット。もう一つある和室(残余室)は納戸化。
23	3DK	⑦'	50代後半	男	その他	借家	一戸建て	50㎡～60㎡未満	11/30	L	机	寝室	寝室	-	L	残余室	-	L+寝室	食事はLの机。就寝、くつろぎはTVのある寝室のベット。来客はほとんどない。コミュニケーションは近くの施設にて取っている。宿泊を伴う来客は納戸代わりにしている和室で対応。
30	3DK	⑤'	40代前半	女	教員(公)	借家	共同住宅	50㎡～60㎡未満	8/39	L	座卓	寝室	L	-	L	L	-	L	DKではなくLの座卓にて食事を取っている。寝室を南に置きたかったが、書斎のスペースが北の部屋では足りず、北が寝室となる。
2	3LDK以上	①	60代前半	女	自営業	持ち家	共同住宅	80㎡～90㎡未満	4/4	LDK	テーブル	LDK+寝室	LDK	接客室	LDK	残余室	接客室	残余室	内公の来客の頻度が高いのに内公のためのテーブルが常設ではない。寝室にエアコンがないため、夏はLDKで寝ることもある。
4	3LDK以上	⑤'	50代前半	女	教員(公)	持ち家	共同住宅	70㎡～80㎡未満	5/5	LDK	テーブル	寝室	LDK	-	LDK	残余室	-	L	朝食のみ自宅にて取る。夕食は職場近くにある実家にて。共用廊下側の部屋で就寝を取っているが、廊下の明かりが強すぎ、眠りにくい。
5	3LDK以上	⑤'	50代前半	女	教員(公)	持ち家	共同住宅	80㎡～90㎡未満	9/10	LDK	テーブル	LDK+寝室	LDK	-	LDK+残余室	残余室	-	残余室	道路との関係で、寝室の位置を南から北へ移した。寝室はあるが、Lにてくつろぎながら就寝してしまうことがある。3つある残余室は、2つは納戸、一つは洗濯干し場になっている。
27	3LDK以上	⑤'	30代後半	女	技術職(他)	借家	共同住宅	80㎡～90㎡未満	4/30	LDK	テーブル	LDK+寝室	LDK+寝室	-	LDK	残余室	-	LDK+残余室	食事は自宅でするよ余裕があまりない。くつろぎも、寝に帰ってくるだけである。物を片付けている余裕がなく、残余室が物置となっている。
3	4DK以上	③	60代前半	女	教員(公)	持ち家	一戸建て	100㎡以上	2/50	DK	テーブル	L	L+DK	残余室	DK	残余室	-	L+DK	以前は座敷で就寝。着替えなどは座敷にあり、座敷とL両方が自室となっており、寝室(自室)が揺らいでいる。
12	4DK以上	⑥	50代後半	男	技術職(他)	持ち家	一戸建て	90㎡～100㎡未満	1/33	L+DK	座卓	L	L	L	L	残余室	-	-	接客用の応接室があるが、エアコンが壊れ、使っていない。すべてをLで行っている。一人になってからの時間が短いため、以前の状況がまだ残っており、生活の見直しができていない。
28	4DK以上	①	50代前半	女	技術職(他)	持ち家	一戸建て	100㎡以上	1/150	L	座卓	寝室	L+寝室	接客室	L	接客室	-	寝室	150年の歴史ある民家に居住。最近一人暮らしとなったため、自分の活動は自室(寝室)にて行っている。接客は座敷ではなく続き間の方で行っている。

5．1　「一人家族」世帯の属性

「一人家族」世帯の属性を図4に示す．

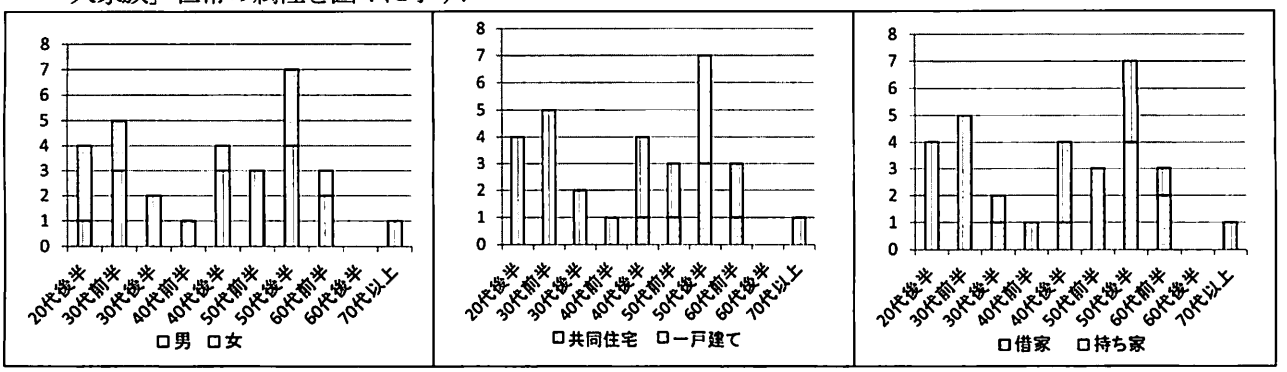


図4．「一人家族」世帯の属性

30世帯中，男性単独世帯は10世帯，女性単独世帯は20世帯．また，借家住まいは11世帯，持ち家住まいは19世帯．一戸建ては6世帯，共同住宅は24世帯．年代ごとのばらつきは，図4の通りである．

5．2　「一人家族」世帯の生活行為の分離と重複

研究目的の第一で定義した，生活行為の分離と重複の傾向をみる．

生活行為の分離と重複のタイプ分けをおこなうにあたり，生活行為については，目的の第二で定義した外公の行為を「外公流」，内公の行為を「内公流」とする．また，食事を「食」とした．趣味は，調査の結果から多岐にわたると判断できたため，生活行為の分離と重複のタイプ分けからは外すこととした．

生活行為の分離と重複のタイプ分けは図5のようになった．

なおパターン分けの際に，食に関しては，朝食と夕食の場が違う場合があり，夕食の場を食の行為の場とした．また，就寝に関しては，寝室が就寝の場であるがごく稀にLも利用する場合は，寝室を就寝の場として分類した．10パターンの中で，外交流が住宅内に無い世帯もあり，その場合は番号に“´(ダッシュ)”を付け表現した．

図5より，「就寝」と「食」の関係は，他の行為（くつろぎ）を含めて重複することはあってもそれだけで重複することのない分離関係にある．また「食」は「くつろぎ」および「内交流」と積極的な重複が図られていることが分かった．

① 外交流+内交流・食・くつろぎ+就寝 (外交流)+(内交流・食・くつろぎ)+(就寝)	モデル①：「外交流」空間が別に用意されており，「内交流」，「食」および「くつろぎ」が同一空間で行われ，「就寝」は独立しているタイプ．
② 外交流+内交流・くつろぎ・就寝+食 (外交流)+(内交流・くつろぎ・就寝)+(食)	モデル②：「外交流」空間が別に用意されており，「内交流」，「くつろぎ」および「就寝」が同一空間で行われ，「食」は独立しているタイプ．
③ 外交流+内交流・くつろぎ・就寝・食 (外交流)+(内交流・くつろぎ・就寝・食)	モデル③：「外交流」空間が別に用意されており，「内交流」，「くつろぎ」，「就寝」および「食」が同一空間で行われているタイプ．
④ 外交流・就寝+内交流・食・くつろぎ (外交流・就寝)+(内交流・食・くつろぎ)	モデル④：「外交流」と「就寝」が同一空間，「内交流」，「食」および「くつろぎ」が同一空間で行われているタイプ．寝室が和室(座敷)の場合にこのモデルとなる．
⑤ (外交流)・内交流・食・くつろぎ+就寝 ((外交流)・内交流・食・くつろぎ)+(就寝)	モデル⑤：「外交流」，「内交流」，「食」および「くつろぎ」同一空間，「就寝」が単独空間で行われているタイプ．「外交流」が住宅を離れ，外部での対応となる場合もある．
⑥ (外交流)・内交流・食・くつろぎ・就寝 ((外交流)・内交流・食・くつろぎ・就寝)	モデル⑥：「外交流」，「内交流」，「食」，「くつろぎ」および「就寝」のすべての行為が同一空間で行われているタイプ．「外交流」が住宅を離れ，外部での対応となる場合もある．
⑦ (外交流)・内交流・食+くつろぎ・就寝 ((外交流)・内交流・食)+(くつろぎ・就寝)	モデル⑦：「外交流」，「内交流」および「食」が同一空間，「くつろぎ」および「就寝」が同一空間で行われているタイプ．「外交流」が住宅を離れ，外部での対応となる場合もある．
⑧ (外交流)・内交流+食・くつろぎ+就寝 ((外交流)・内交流)+(食・くつろぎ)+(就寝)	モデル⑧：「外交流」および「内交流」が同一空間，「食」および「くつろぎ」が同一空間，「就寝」が単独空間で行われているタイプ．「外交流」が住宅を離れ，外部での対応となる場合もある．
⑨ (外交流)・内交流+食・くつろぎ・就寝 ((外交流)・内交流)+(食・くつろぎ・就寝)	モデル⑨：「外交流」および「内交流」が同一空間，「食」，「くつろぎ」および「就寝」が同一空間で行われているタイプ．「外交流」が住宅を離れ，外部での対応となる場合もある．
⑩ (外交流)・食+内交流・くつろぎ+就寝 ((外交流)・食)+(内交流・くつろぎ)+(就寝)	モデル⑩：「外交流」および「食」が同一空間，「内交流」および「くつろぎ」が同一空間，「就寝」が単独空間で行われているタイプ．「外交流」が住宅を離れ，外部での対応となる場合もある．

図5．生活行為の分離と重複による分類（１０タイプ）

表2.「平面によるパターン」別生活行為と空間のずれの分析(1)

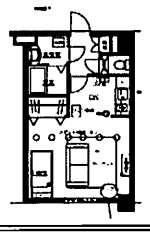
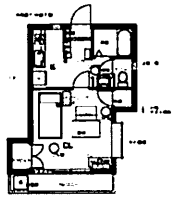
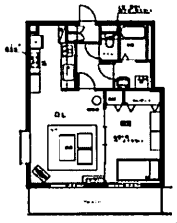
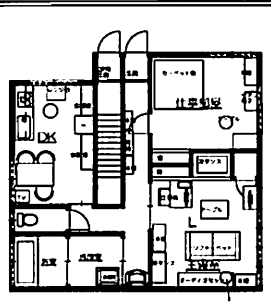
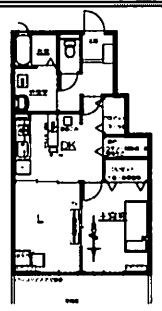
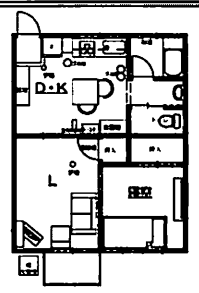
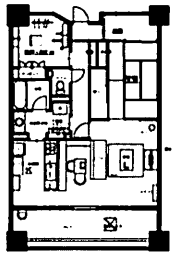
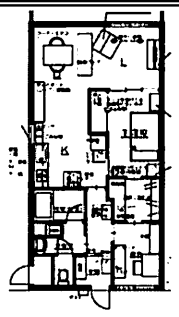
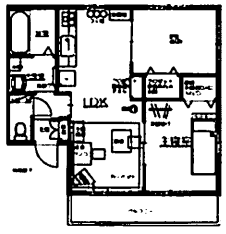
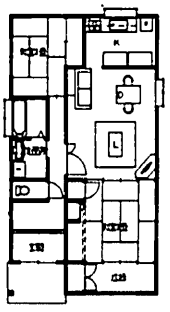
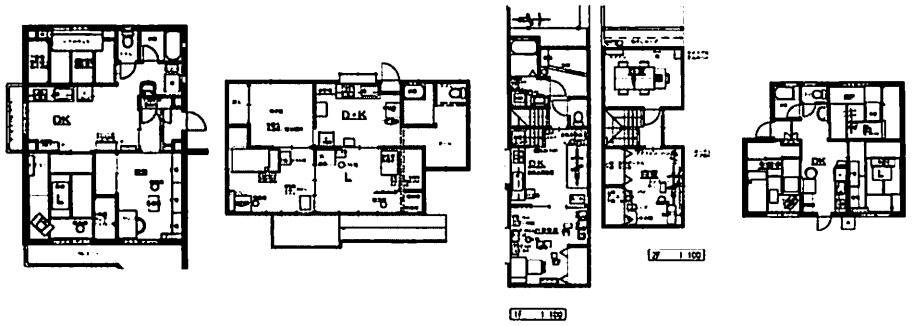
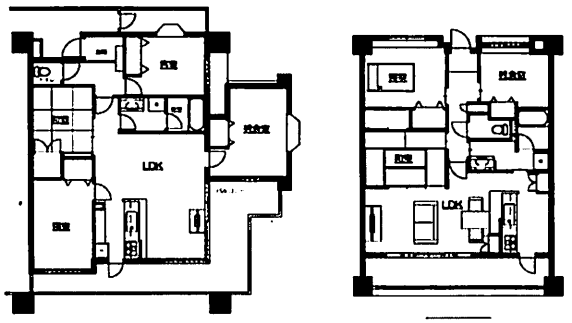
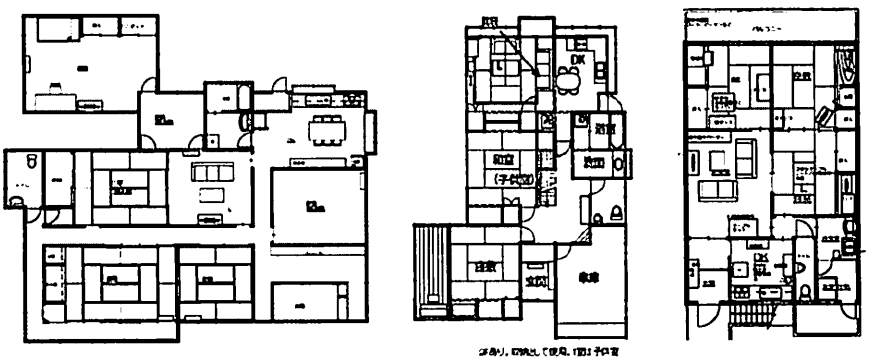
平面によるパターン	タイプ	No.	代表プラン／生活行為と空間のずれの分析	
ワンルーム	⑥'	16		1部屋しかないためにすべての行為の空間が重ならざるを得ないが，一人で住むにおいては何ら問題が無い状況である．食のスタイルは空間確保の理由からか，床座・座卓を使用している．外交流は持ち込まず，それ以外の行為が一部屋で行われる⑥´タイプである．
1DK	⑥'	7・21		DKの空間があるにもかかわらず，すべての行為をLにて対応している．食のスタイルは床座，座卓を使用．Lに食の行為が入ってくるため，フレキシブルな座卓を利用し空間確保をしていると思われる．2世帯とも外交流は持ち込まず，それ以外の行為が一部屋で行われる⑥´タイプである．
1LDK	⑤'	1・9・13・25		4世帯とも，寝室を分離独立．Lとの関係は，建具を開放することによりワンルームとして使える間取りであった．LDKにて就寝以外の行為を実施．空間確保の理由からか，食は床座・座卓を使用している．⑤´タイプである．
2DK	② ⑤' ⑩'	11 15・18・26 24	  	
	5世帯のうち，DKが食事行為のみをする空間の場合がNo.11及び24に見られ，食のスタイルはテーブルを利用するイス座であった．DKが食事，くつろぎ，接客と行為が重なっている場合は，座卓の利用が見られた．また，DKは調理をするだけの空間で食事はLでする場合が2世帯あり，その場合の食の空間は，Lで自分が一番寛げる場所であるパソコンデスクや座卓であった．2DKタイプは，行為の重ね方によっては1室を接客専用または趣味部屋(残余室)とすることができる．前者は②タイプのNo.11の世帯，後者は⑤´タイプのNo.18の世帯である．			
2LDK	④ ⑤ ⑤' ⑥	29 10・17 14・20・22 6	   	
	座敷がある場合，そこでの就寝を躊躇しLを利用しているケースが⑥タイプに分類されるNo.6の世帯．また，座敷を就寝と外交流の場として使っているケースがタイプ④に分類さるNo.29の世帯．それ以外は，外交流は持ち込まず，就寝は独立し，それ以外の行為は一部屋で行われる⑤´タイプである．残余室はゲストルーム，趣味室，納戸化している．LDKがテーブルを置くだけの十分な広さがあるにもかかわらず，座卓にて食事をしている世帯が4世帯もあり，座卓にくつろぎを求めていることが窺える．			

表3.「平面によるパターン」別生活行為と空間のずれの分析(2)

平面による パターン	タイプ	No.	代表プラン／生活行為と空間のずれの分析
3DK	⑤′ ⑦′ ⑧ ⑨	30 23 8 19	
	今回調査した3DKのパターンは，築年数が30年を超えている賃貸住宅という特徴がある．どの世帯も食事をDKでは取っておらず，Lが2世帯，残りの2世帯は，くつろぎの場でもある仕事部屋と寝室にて食事を取っている．自営の世帯は仕事部屋および接客室の確保ができている．なおNo.30のように職場があり仕事を自宅に持ち帰る場合は，その行為の場を自営の場合の仕事部屋と分け残余室とした．4世帯とも就寝は独立室を使用．寝室にくつろぎの行為が重なってくる場合が2件ある．その場合の残余室は納戸化している．		
3LDK以上	① ⑤′	2 4・5・27	
	No.2の世帯は，外交流と就寝が独立し，それ以外は同一空間で行われる①タイプである．また，それ以外の3世帯は，外交流は持ち込まず，就寝は独立し，それ以外の行為は同一空間で行われる⑤′タイプである．部屋数に余裕があり，残余室が納戸化しており，宿泊を伴う来客がある場合ゲストルームとして使用されている．		
4DK以上	① ③ ⑥	28 3 12	
	3世帯ともに家族があり何らかの理由で単独世帯となった世帯である．3世帯ともに一戸建てで築年数が古く，規模が大きい．家族と世帯を構成していた時の外交流を単独世帯となった時の外交流と表現している節もあるが，本家として接客室としての座敷の必要性もあるようで，一人世帯となっても，外交流の空間を確保する努力をしている．現況すべての行為が同一空間で行われている⑥タイプのNo.12の世帯も，忙しさゆえに住まい方の見直しができておらず，今後の要望としては，外交流を独立させたい意向がうかがえた．残余室は納戸化している．		

5．3 「平面によるパターン」別生活行為と空間のずれ

生活行為の分離と重複のパターンは，「一人家族」世帯でも，生活行為間に同一空間では避け合う場合と，重複を意に介さないものとがあることは明らかになった．ではそのような特徴を持つ生活行為が，住宅平面の違いにより，どのような問題を引き起こすのか，すなわち生活行為と空間のずれに注目して分析することにより，ずれの少ないつまり住みやすい住宅平面はどのようなものかを明らかにする．平面によるパターン別と生活行為と空間のずれに関して表2・表3にまとめた．なお，表の中に分析は挿入した．

5．4 生活行為の空間

生活行為が行われる空間を明確にさせるために，平面のパターン別に生活行為がどの部屋で行われているのかをグラフにした(図6)．各行為ごとの特徴をまとめる．

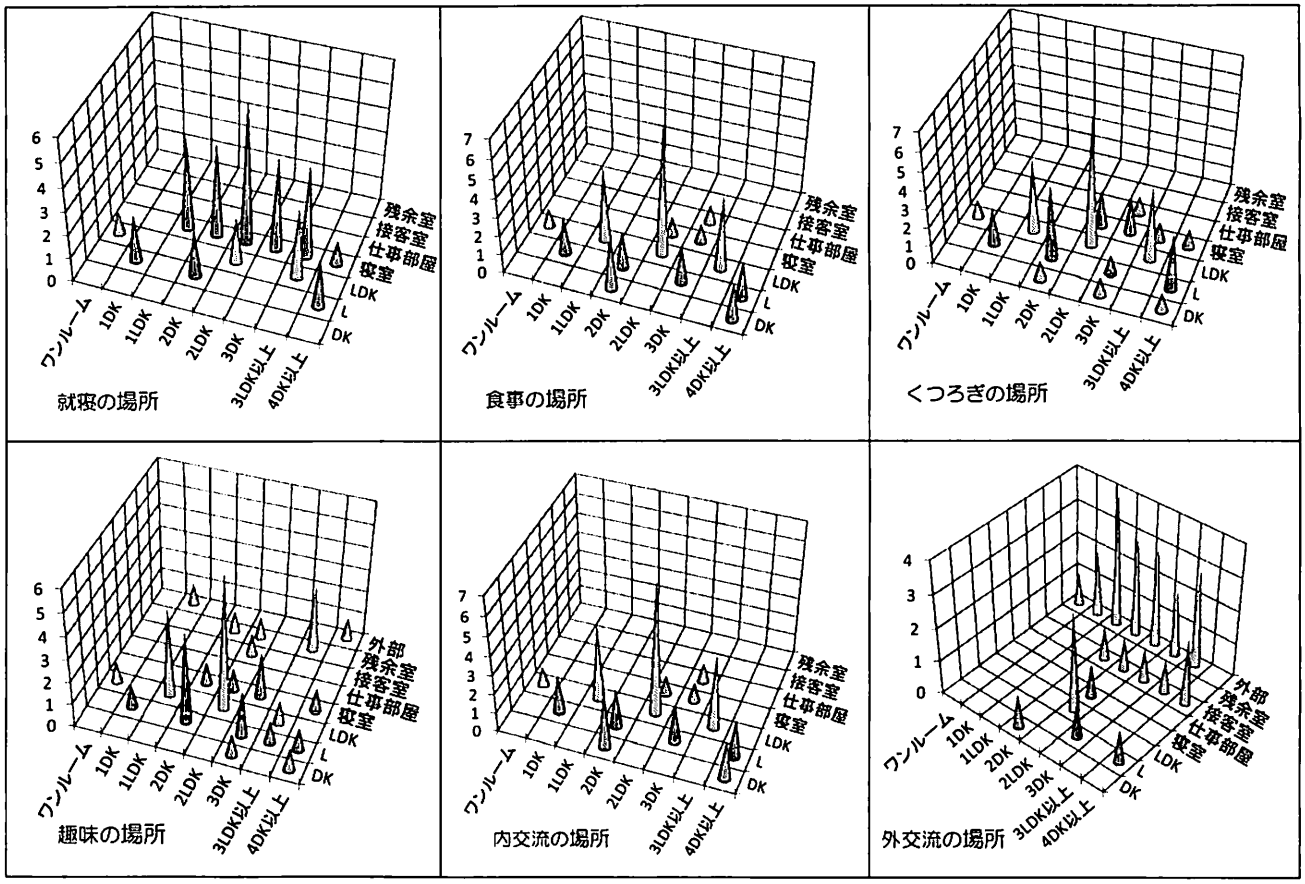


図6 生活行為の行われる空間

(1) 就寝

就寝の行為が独立しているのは，図5の①，⑤，⑧，⑩の20世帯である．座敷が寝室となっている場合は，外交流との機能の重複が見られる．しかし，外交流が頻繁ではないため，そのタイプである図5の④も独立しているといってもよい．寝室が独立していても場合によってはLにて就寝を取る場合も5世帯あり，その原因は，TVを見ながら就寝したり，エアコンがLにあって寝室にないために夏場はLにて就寝たり，といった理由が上げられた．

(2) 食事

食事の行為が独立しているのは，図5の②のみである．また，独立があり得るのは表2・表3のDKパターンである．図6によると，食事の場所としては，LDK，L，DKを利用しているが，寝室，仕事部屋を利用している世帯もある．これは単独世帯であるが故の結果である．またDKパターンだが，Lにて食事行為をしている場合が半数以上あり，食事をしてそのままくつろぐという現状がうかがえる．食事のスタイルだが，座卓利用が16世帯，テーブル利用が11世帯，パソコンなどの机の利用が3世帯ある．一人家族の場合，食事専用のテーブルを用意せずにフレキシブルな座卓を利用する場合が多いと言える．また，趣味のパソコンをしながら食事をするといった世帯もあり，食生活の軽視が窺われる．

(3) くつろぎ

くつろぎ行為は，食，就寝，内交流など何らかの行為と重なって存在する．LDK でのくつろぎ行為が一番多く，次にLと続く．また，寝室でくつろいでいる世帯も6世帯ある．くつろぎの空間では，TVやパソコンの存在が大きい．

(4) 趣味

残余室を利用した趣味行為は5世帯，外部利用は2世帯あった．外部に関しては，内部の趣味がある場合はそちらについてカウントしているため，もっと多くの世帯を上げることができると考える．

(5) 内交流

内交流は図5および図6を見ても明らかのように，くつろぎ，食事の空間と重なることが多いと言える．

(6) 外交流

外部での交流が30世帯中18世帯，全体の6割が該当する．接客室利用も6世帯あるが，そのうち5世帯が自営業者である．自営業者以外の外交流は，外部へと移行していると言える．

生活行為別平面パターンのグラフを図7に示す．

図7に示す通り，調査対象の30世帯中16世帯が「⑤外交流・内交流・食・くつろぎ＋就寝」のタイプに属していた．そのうち外交流が無い世帯が14世帯，外交流がある世帯が2世帯，合計16世帯である．3LDK以上の空間を持つパターンであっても，生活行為としてはこのタイプとなる場合が多く，残りの居室は残余室として納戸の利用となっていることを考えると，⑤の最小パターンである1LDKに納戸としての機能を満たした部屋をプラスすることが，単身者にとっては住みよい間取りと提言できる．

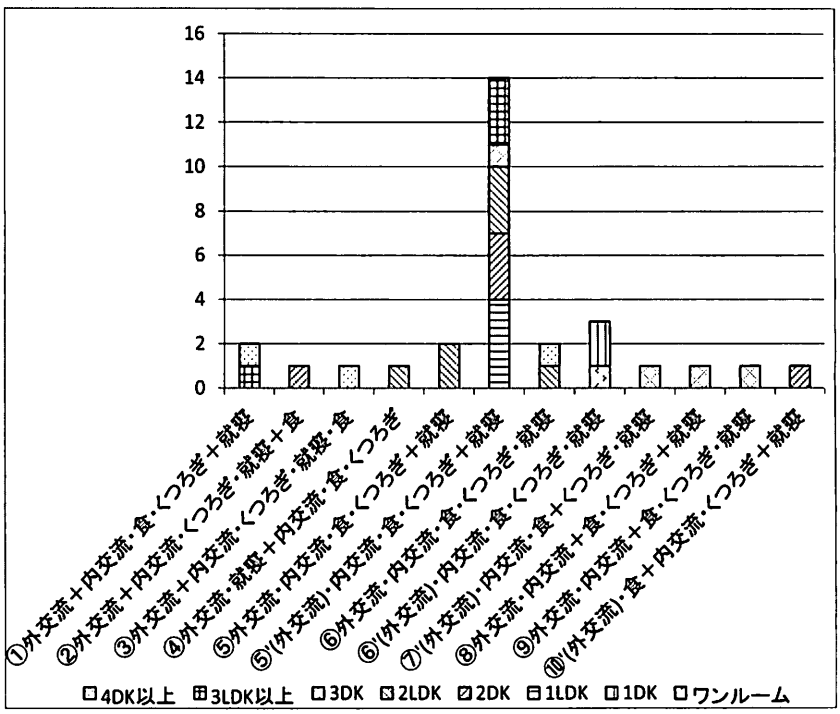


図7 生活行為別「平面パターン」

6. まとめ

第一の目的に掲げた住居の基本的な役割である，就寝，食事，くつろぎの空間のあり方であるが，就寝に関しては30世帯中20世帯が単独で空間を持っており，独立性が保たれているといってもよい．しかし，エアコンやTVの存在の関係で寝室以外の空間で休む場合もあり，一人であるが故の空間の揺らぎが生じている．食事に関しては，機能の重複がない世帯は2世帯しか存在しない．これは，近年間取りのパターンがDK指向からLDK指向へと変化していることが原因といえる．食としての独立性が無くなったからか，食事専用のテーブルの利用も30世帯中11例しかなく，フレキシブルに利用できる座卓を愛用している世帯が16例もあった．また食に関する軽視も見られた．

第二の目的である接客であるが，親しい関係を前提としない接客（外公）は，すでに外部空間へと移行していることが窺われた．今後の住宅の計画に置いては，外公の接客に関しては住宅内部に持ち込まず，たとえば玄関に入る前の空間の充実を図ることにより近隣とのコミュニケーションを取るといった工夫を取り入れたほうが良い．親族，友人，近隣住民などの親しい相手の場合は，LDK，L，DKが内公空間となっており，一緒にいてもくつろぐことのできる相手のみ住宅内に招き入れている．近隣に対するコミュニケーションは，「ほどほど」に必要と感じており，災害時に存在を確認できる程度が良いといったことのようだ．ただし，年齢による差が出ており，50代後半頃から特に近隣とのコミュニケーションの必要性を感じるようだ．

今後，安全対策要求やコミュニティの位置づけなどについて，詳しく分析する予定である．また，親族世帯との関係を反映して，収納要求や住み続けるかどうかといった今後の展望や変化についても検討する．

参考文献

1) 北川圭子・大垣直明：我が国におけるダイニング・キッチン成立過程に関する研究，日本建築学会計画系論文集 No.580, 2004.04
2) 切原舞子・鈴木義弘・岡俊江：平面構成・希望用途からみた座敷への住要求構造の分析，日本建築学会計画系論文集No.580, 2008.11
3) 谷本道子・藤原三恵子：若年単身世帯の居住実態に関する研究(1・2)，日本建築学会大会学術講演梗概集1990年度F分冊, 1990
4) 加茂みどり・高田光雄：「個人化」に対応した住戸の空間配列と生活の適合性に関する研究-実験集合住宅NEXT21における住居実験を通じて，日本建築学会計画系論文集No.596, 2005.10
5) 山本理顕・長谷川豪・藤村龍至・中村拓志・原広司・東浩紀・金子勝：地域社会圏モデル，INAX出版，2010
6) 宮野順子・高田光雄・安枝英俊：親子・配偶関係を含まない同居の住まい方からみた住戸内共用空間に関する研究，日本建築学会計画系論文集No.666, 2011.08
7) 統計トピックスNo.47：http://www.stat.go.jp/data/jyutaku/topics/topi472.htm
8) 落合恵美子：21世紀家族へ(第2版)，有斐閣，1997
9) 落合恵美子：21世紀家族へ(第3版)，有斐閣，2004
10) 西川祐子：住まいと家族をめぐる物語，集英社新書，2004
11) 鈴木成文・上野千鶴子・山本理顕・布野修司・五十嵐太郎・山本喜美恵：家族を容れるハコの戦後と現在，平凡社，2004
12) 持田美沙子・鳥飼香代子：「一人家族」世帯の住宅計画－6事例の検討を中心に－，日本建築学会研究報告．九州支部. 3, 計画系 (50), 225-228, 2011-03-01